

～カンボジア、タイを旅して～



①



②



③



④

カンボジアといえばシエムリエブのアンコール=ワットが有名だが、そのほかにも日本ではみられないような人々の暮らしをこの国ではみることができる。

トンレサップ湖は“伸縮する湖”といわれ、乾季は水深1m、面積2500km²だが、雨季はメコン川に流れ込むトンレサップ川が逆流し、水深9m、面積16000km²まで拡大する。私が訪れたのは12月末の乾季であったが、それでも対岸がみえず、海のように広がった。小さな港をボートで進んでいくと水上集落がみえてくる(写真①)。ここに住む人々のほとんどは漁をして生活している。簡素な家屋が湖の上にたくさん浮かんでおり、船が通るたびにゆらゆら揺れる。水上には船に乗った物売りや生活雑貨を売る店もある。なかでも私が一番驚いたのは、学校も水上にあったことだ。学校に横付けした手こぎボートで帰ってくる学生たちをみたときは、世界にはいろいろなくらしがあるものだとしみじみ思った。

クメール人の子どもは午前か午後のどちらかは学校に行き、あとは家の手伝いをするか友だちや兄弟と遊んでいることが多い(写真②)。裸足で歩いている子や自転車でビュンビュン走っている子、遺跡の近くでボール遊びをしている子たちなど、とにかく元気に生活している子が多かった。

タイは国民の9割以上が仏教徒といわれているが、マクドナルドの前にいるロナルド・マクドナルドもタイ仕様だ(写真③)。この国ではさまざまなかたちで仏教が暮らしに溶け込んでおり、街のいたるところにある寺は開放的で、古くから地域と密接に結びついている。かつて子どもは寺で読み書きを学んでいた。その辺りは日本の寺子屋にも似ているが、さらに学問を究めたい者は出家して寺に残り、仏教はもちろん、医学や占星術、絵画なども学んだという。ほかにも、身寄りのない者を引き受けたり、病人に治療を施したりなど、寺は福祉施設や病院の役割も担っていたようだ。現在でもマッサージを受けられたり、学校などを併設したりする寺は少なくなく、地域のコミュニティーセンターのような場所ともいえる。

どこの国の市場もただ歩いてみるだけでもものすごく面白いが、タイの市場も東南アジアのごっちゃりして混沌としたようすが十分感じられる場所だった(写真④)。おもちゃ屋の前で魚が売られていたり、そこを原付バイクが3人乗りで走り去り、そうかと思ったら猫や犬が寝そべっていたり…。そこには物も人も動物も関係なくごちゃっと存在する。私は、そのごちゃっとしているところで地元の人たちと一緒に麺をすすったり、ご飯を食べたりするのが大好きだ。
(宮城県白石工業高等学校 猪股未来)

